

## 令和元年（2019年）ぶらくり会特別講演報告

開催日時：8月10日(土)午後2時00分～午後3時40分

開催場所：生田神社会館

講師：三代目 桂春蝶（かつら しゅんちょう）師匠

講演テーマ：落語で伝えたい想い『エルトゥール号物語』

—報恩、時を越えて・・・和歌山から生まれたトルコとの友情—

出席者数：156名（会員48名、会員家族14名、和太先生2名、現役学生4名、友人88名）

昭和53年に始まったぶらくり会が今回で第200回目を迎えることになったのを記念して、三宮・生田神社会館に三代目桂春蝶師匠をお迎えして、和歌山県串本が舞台の「エルトゥール号」海難事故を落語で伝えて頂きましたので、その概略を以下に報告します。

上方落語のホープ桂春蝶師匠による『エルトゥール号物語』は今から129年前に実際に起こった海難事故を題材にした落語ですが、この海難事故は、殆どの日本人は忘れていないか、あるいは知りません。

しかしながら、トルコでは学校の教科書にのって小学生でも知っている日本とトルコの友好関係が今に至るまで続いている歴史上の事実であります。

「エルトゥール号物語」のあらすじは以下の通りですが、156人の参加者は春蝶師匠の軽妙な語り口に引き込まれ、時に涙し、時に大爆笑をして落語を大いに堪能したところです。

エルトゥール号海難事故は、明治23年（1890年）9月16日にオスマン帝国（現在のトルコ共和国）の軍艦エルトゥール号が和歌山県串本町の紀伊大島・檜野崎沖海上で遭難し600人近くの犠牲者を出した海難事故ですが、生存者69人が島民総出での救出、介抱により、後日日本海軍の軍艦2隻でイスタンブールに無事帰還することができました。このことは、オスマン帝国の新聞で大々的に報じられ、当時のオスマン帝国の人々は遠い異国である日本と日本人に好印象を持ったそうです。

この時から、百年近くたった1985年3月、イラン・イラク戦争のさなか、イラクのサダム・フセイン大統領が48時間後、イラン上空を飛ぶ全ての航空機を撃墜すると突然宣言しました。

この宣言を受けて各国は自国民を救出するために特別機を手配したりしていましたが、日本は自衛隊機を（法律上）飛ばせない、民間機も安全が保障されない限り行くことは出来ないということで、当時イランに住んでいた200人以上の日本人は途方に暮れていました。

すると、フセインの撃墜宣言のタイムリミットぎりぎりのところで、トルコ航空が日本人のためにDC10を2機配備すると申し入れてくれたのでした。

なぜ、トルコが日本人のためにと、誰もが不思議がったそうです。その時の日本政府の高官は、外交努力の積み重ねというようなことを言っていたそうですが、トルコ政府の高官は「100年前のエルトゥール号海難事故で日本人から受けた恩を忘れていません。その恩に報いただけです。」と語ったそうです。

トルコでは子供でも知っているこの海難事故がきっかけで大の親日国になったと言われて  
います。

なお、今回は特別講演ということで、柑芦会会員&家族、和歌山大学の先生&学生、会員  
のお友達と広く声がけしました。その結果、参加者は合計156名と大盛況となりました。  
また、講演の後の茶話会では、ぶらくり会が発足した当時、お世話係をされた大学4期の野  
崎雅廣先輩に、発足に纏わる逸話等をお話して頂きました。

以上

ぶらくり会世話人 柑芦会神戸支部 平林 義康 (大学20期)

